

2010年度

# ESPRIT

日本武道学会剣道専門分科会会報

剣道専門分科会会長挨拶

震災と武道教育

平成 22 年度 剣道専門分科会研究会

武道 (剣道) 研究の

国際的交流の可能性について

平成 22 年度 武道学会大会剣道専門分科会企画

中学校武道必修化を迎えて、  
あらためて武道の礼法を学ぶ

弓馬術礼法小笠原教場 31 世宗家小笠原清忠先生をお招きして

会計報告

事務局だより





会長挨拶

# 震災と武道教育

巽申直 (茨城大学)



東日本大震災は、東北地方をはじめとする太平洋沿岸地域に甚大な被害をもたらしました。マグニチュード9.0という未曾有の巨大地震は近年ようやく紐解かれた古文書で知られるようになった平安末期の貞観地震以来のもので、千数百年に一度の規模といます。犠牲になられた方々のご冥福を衷心よりお祈りし、被災された皆さまに対し心よりお見舞い申し上げます。

余震の続く中で迎えた新学期は、入学式の中止や学事日程の変更、授業やガイダンス等の延期などを余儀なくされた学校も多く、これまでにないスタートとなりました。被災地では今なお生活再建の見通しが立たない厳しい状況が続いており、我々教育関係者としては、教育・研究活動の再開に向けて着実な一步を踏み出してもらうことを願ってやみません。剣道専門分科会においても、東日本地域の教育・研究活動に支障を来している会員の皆さまに対し、積極的に支援したいと考えています。さて、未曾有の大災害にさらされた日本人の有様を、海外メディアはどう伝えたのか。震災発生後間もない

「読売新聞」からいくつかの例を紹介しますと、英国のデイリー・ミラー紙はいち早く被災地ルポを載せ、「日本人は黙って威厳をもち、なすべき事をしている」と感嘆をもって伝えたそうです。また、欧米のメディアは「我慢や献身が今も日本人の美德だとすれば、それを最も失わずにきたのは、東北地方のお年寄りだろう。彼らは、救援物資の遅れに怒りやいらだちを顕わにすることはまずない」と報じ、英紙のコラムニストは「自分の身を守るより、棚から落ちる商品を必死で押しとどめようとする店員の姿に“ひそかな献身”を見た」と書いたそうです。この大災害の渦中でも暴動や略奪の起こらない日本人の教育の在り方に、世界は感嘆し注目しているのです。

そのような報道を見るにつけ、「日本人の美德を大切にしている伝統的な行動規範を持っている」とされてきた武道教育に思いを致さざるをえません。被災者に見られる美德は、果たして武道教育とどのような関わりがあったのか。彼らは海外メディアから感嘆される行動規範をどのように身に付けたのか。「行動規範を重視する」という武道教育の在り方

についてあらためて熟慮しなければならないことを痛感した次第です。

来年度からは、いよいよ中学校の武道が必修となります。剣道専門分科会としても社会が期待する日本の伝統文化の継承に答えるべく成果を出し、貢献せねばなりません。さらに近年は剣道文化の海外への伝達方法も課題となり、諸外国の研究者との連携が極めて重要になりました。国際化により、ますますアカデミックな対応が求められているのです。以上の課題を前に日本人・剣道人にとって正念場ともいえる今年度、私は再び役員改選で会長に推挙され、引き続き任を務めさせていただくことになりました。微力ながら更なる学会活動の推進と社会的責務を果たしていく所存です。

最後になりましたが、会員の皆さま方のご健勝と御活躍を心から祈念し、挨拶といたします。

## 平成22年度 剣道専門分科会研究会

### テーマ 武道(剣道)研究の国際的交流の可能性について

#### 「韓国およびポーランドにおける武道研究の現況を踏まえて」

スピーカー：百鬼 史訓 先生(日本武道学会会長 / 東京農工大学大学院教授)

司会：長尾 進(剣道専門分科会幹事長 / 明治大学教授)

日時：平成23年5月28日(土) 15:30 ~ 17:00

※当初3月26日を予定。大震災の影響から上記期日に延期して実施

場所：明治大学 和泉キャンパス 第1校舎6階(第1会議室)

#### 司会 (長尾幹事長・明治大学)

皆さん、こんにちは。本日は年度初め、震災の影響もあるにかかわらず、特に若手の研究者の方々に多くお集まりいただきありがとうございます。今日は、武道研究、剣道研究の国際的交流の可能性について、昨年、百鬼先生が韓国とポーランドでのフォーラムを視察していらっしゃいました。その現状を皆さんで共有したいということで、今日開催させていただきました。まず会長の巽先生からご挨拶をお願いいたします。

#### 巽 (剣道専門分科会会長・茨城大学)

皆さん、こんにちは。役員改選で、今年度も会長を仰せつかりました巽です。どうかよろしく願い申し上げます。

この研究会は3月に予定されていたのですが、大震災の影響があり開催が延期されておりました。その後開催そのものも危ぶまれていたのですが、本日ここに開催できますことを心から嬉しく思います。またこういう状況のなかで、今年度の研究会にあたり講演をお引き受けいただきました百鬼・武道学会会長に、まず感謝申し上げたいと存じます。

さて情報発信は、個人レベルではなくて、組織として行うことが重要と考えています。組織としての情報を世界へいかに提供できるかが組織の評価にもつながる時代にあります。その前に、諸外国における武道学研究や研究者の動向は、どうなっ

ているのか非常に気になるところで

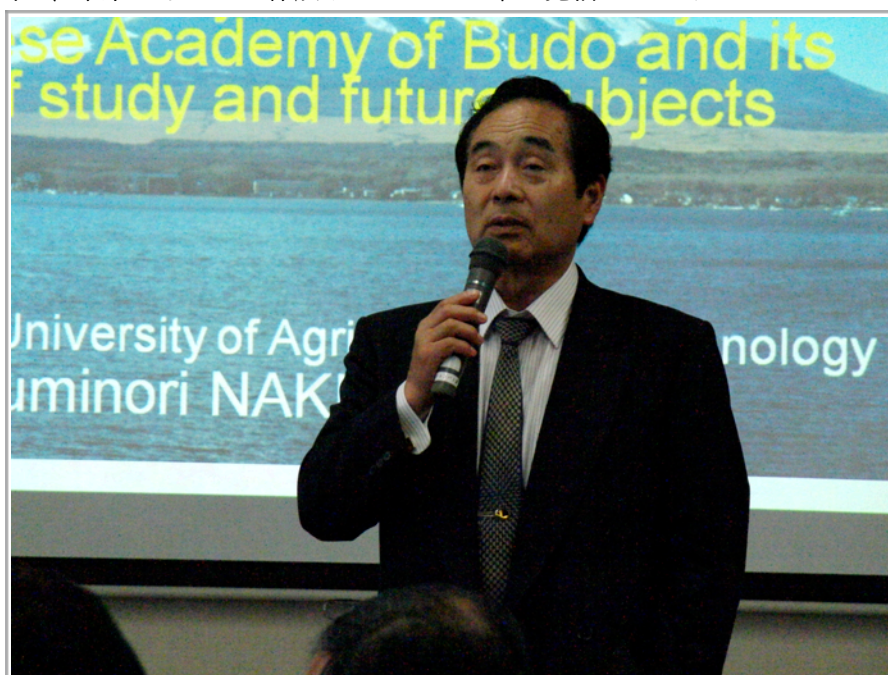
今日百鬼先生からは韓国・ポーランドの様子を伺えることで大変楽しみにしています。百鬼会長は武道学会を日本国内のみならず国際的な大会にしていこうというお考えもあるそうで、今日はその百鬼先生からお話を伺い勉強させていただきたいと思っております。どうかよろしくお願ひ申し上げます。

百鬼 こんにちは。剣道専門分科会の仲間との宴で「なにか話を…」と依頼されまして、本日を迎えることとなりました。従来の学会報告とは異なり、私の経験を皆様方にお話をしたいと思っております。今回のような企画は、本来であれば一杯飲みながら

の方がおもしろいかもしれませんが、堅苦しくなく聞いていただきたいと思っております。

巽先生からお話がありました「武道とはいったい何ぞや？」という大きな命題があります。この命題は、(武道学会でも)ずっとテーマとして議論しています。とくに、武道の概念、その本質・特性というものはいったい何なのかいうことをです。それを武道学会として科学的に確認していきましようということで取り組んで来ております。

もし、「武道を、このような考え方ととらえていく」という定義が、学会員、あるいは日本人全体で共有することができれば、それを海外に正確に発信していくことができる



思うのです。ただ、現在は、各種武道は実技が優先され、競技的な一つの身体運動文化として海外に普及されています。外国人の方は、なんとなく武道は東洋的な哲学があり、従来の欧米諸国の文化とはちょっと異なっているからやってみようなど、そのような感覚で武道を捉えたり、関わりを持っている人が多いのではと思っています。ただし、「何か違うのだけど、何が違うのか」ということはよく判ってはおりません。

そのような状況ですので、我々武道学会とすれば、まずそのへんのことを明確にさせておく必要があると思うのです。国際化という言葉が問題になりますが、単に広めればいいという考えではなくて、日本人の中で武道とは何かということを中心に自覚し、理解した上で、海外の方にもお薦めしていく必要があると考えています。

ですから、世界の流れの中で、世界の考え方に流される、もしくは影響を受け、武道の持つ本質に近い部分が、異なって解釈されるとか、競技のかたちさえもどんどん変わっていくということは不本意なことなのです。そのようなことはあってはなりませんので、我々から「武道とはこういうものですよ」ということを正しく発信していくこと、もしくは、そういった姿勢が求められると思います。

私は、学生たちに日頃、こう話しております。「君たちはコップの中に入って、コップの内側しか見ていないのではないか。コップの外側から見たことがあるか、上から見たことがあるか」と。つまり、物事の本質を究めるためには色々な角度から、あるいは俯瞰的に見たり、時間系列をもって将来を展望したりすることなどが重要です。そのような視点が大切であり、このことは、我々学会員も持つておかなければなりません。

とくに武道の国際化という問題は、我々は内側から見ていますので、外からはどのように見られているのかということが、すごく大事なことになってくるわけです。（この問題は）これまでに色々なシンポジウム等で、たくさんの意見をいただいています。私自身、自分の肌感覚、皮膚感覚で知りたいという欲求がありました。たまたま、国際武道学会というものがポーランドで行われているということを知り、福島大学の佐々木先生（柔道）からお聞きし、私も参加してまいりました。

学会そのものは、2年目ということで、まだきちとした組織ができていないようでした。タイのチュロンコン大学のチャチャイ教授と仲良くなりまして、私の面倒をすごくよく見てくれました。当日、私も分科会で発表を聞いていたところ、その彼が、ある別会場でセッションの座長をやっているのを探していると呼び出しがあり、会場に駆けつけたら突然、「お前の番だ」と言うのです。たまたまパソコンを持っていたので、発表をすることができました。私にとっては非常に貴重な経験でしたが、そのようなことが許される学会ということです。

この学会についてですが、正式にはInternational Martial Arts and Combat Sports Scientific Society (IMACSSS)です（写真）。ポーランドのジェシエフ大学教授のCynarski教授が会長をしております。この学会大会には、ポーランドの日本大使館の後援

も頂いているそうです。

私は、武道関係の国際学会に出席するのは全く初めてでした。柔道は、オリンピック種目になっているので、研究集会や学会はいくつかあるようです。ただ、武道という広範囲を対象とした学会はあまりないと思います。この学会に参加していた人は社会学研究が専門の先生方が多いと思いました。資料にマーシャル・アーツ (Martial Arts) と書いてありますが、これが実は今日のテーマです。昔は、武道のことを英語で Martial Arts と言っていましたが、今、日本武道館ではマーシャル・ウェイ (Martial Ways) という言葉を使っています。「武道：Budo」という言葉は、昨年の学会でもお話がありましたように、英語辞書にはありません。それはともかく、問題は、日本人が考えている武道と、この Martial Arts が本当に同じかということです。実は、Martial Arts を Martial Ways に変えたということは、そのあたりのニュアンスが異なっていると推察します。

ちょっと話がそれますが、この学会の総会の際、機関誌的な位置付けとして Archives of Budo という雑誌があるので早稲田大学・志々田教授と、こう尋ねました「学会で Martial Arts and Combat Sports という表記を使っているのに、機関誌ではなぜ“武道”という言葉を使っているのですか」。この質問に対し議論が盛り上がり、「名称を変えるべきだ」とか



いう過激な意見も出てきました。実は、武道という言葉を使ったのは、たまたま、初期に始めた人たちが、柔道の嘉納治五郎先生を尊敬していたということだそうです。その後、「今、知名度が非常に高くなってきているから、いまさら変えるのはデメリットだ」「いやいやこの際変えたほうがいい」という意見もでしたが、結局このままの方がいいということになりました。そして「将来問題が起こった時には、議論しましょう」ということで、議論が先延ばしになりました。私はこの議論を聞いていて、「Martial Arts=武道」となっているけれど、微妙に違いがあるのではないかと感じました。さらに、Combat Sportsという表記もあるので、Combat SportsとMartial Artsとは何が違うのか。実は、タイのムエタイ等もあるわけですよ。タイのチャチャイ先生はムエタイの指導者です。おそらく線引きがきちつとできていないのだと思いました。だから、あえて二つを並列しているのではないかと思います。

そこでです。これから「国際武道学会」という言葉を使うとします。それが世界的に理解されるのかという問題が起こると思うのです。世界はMartial Arts and Combat Sportsということで進んでいるとすれば、その言葉を使った方が、外国人には分かりやすいということになります。でも、日本武道館は武道をMartial ArtsではなくてMartial Waysという言葉を使いました。特性・基本的な考え方・哲学を含めて異なっているので、名称も充分に吟味しなければいけないということになるわけです。Martial Arts, Combat Sports and Budoという妥協案もあるかもしれません。

日本人の感覚としては、Combat SportsとMartial Artsに武道を入れるということに違和感があると思います。国際会議を行なう際、名称ひとつとっても今のような矛盾がありま

すので、我々は、ある程度整理をする必要があります。これが一番言いたいことです。

私達がとりあえずルールを敷きますが、これからそのルールを伸ばしていくのは若い皆さん方です。このあたりを理論的に裏付けた形で、国際化を進めることが必要だと思います。

ただ剣道の世界では、国際化という言葉を使うのは注意しなければなりません。いわゆる「日本剣道の普及」という言葉を使って韓国の人たちと話をすると、彼らは「日本剣道の世界化」という言葉を使います。そして「国際化とは違う」と……。国際化というのはいろんな考え方の人たちが、それぞれの価値観に元づいて共通のルールをつくり、そのルールに基づいて競技することです。当然柔道のようにどんどん競技形態が変わっていきます。今日、剣道は日本が中心となり、経済的にも支援しています。でも、今後、各国が補助をもらい経済的な支援が必要なくなるかもしれません。そうすると投票権は各国一票ですので、多数決で、韓国の意見、もしくはその他第三国の意見が採用されるかもしれません。そうすると、そこで主導権をとった人の考え方や築いたルールに従うことを余儀なくされるかもしれません。

もともと文化は基本的に時代とともに変容するものです。運動文化もわかりです。でも、時代は変わっても変えてはいけない本質的なものがあるのも事実です。ただ、本質とは何かと言うとこれが難しい。それを我々がある程度、整理をしておかないといけません。間違いなくここ数年の間に、「武道とは何か」という答えを求められると思います。ですから皆様方にはそういうつもりで、臨んでいただきたいと思います。

このような話をしても終わりません。先を急ぎます。この学会で見えたことを紹介します。剣道専門分科会でもワークショップをやっていますが、この学会でもありました。ただ、内容に疑問が残るものも少なくありませんでした。武術家と称して演武をするのですが、残念ながら、必ずしも納得のいくようなものではありませんでした。ワークショップのヨーロッパ武術で一番すごかったのが、長い剣（金属武器）で打ちあったものがありました。剣を持つてみたら本当に重い。持つだけでも大変なのにそれを振り回していました。防具は着けてましたが非常に危険でした。「古来の騎士道に由来する武術」ということでしたが、安全性の観点からどうなのでしょう？ ポスター発表や口頭発表もあり、いろいろな国から参加していました。ただ、研究の方法論とか





さて、最後にもう一度お話ししますが、Martial Artsというのは、武道と同じなのですか？ 横文字のBudoとMartial Artsと武道は本当に同じなのか？ ということを開いて直す必要があると思います。それからCombat SportsとMartial Artsの違いもです。昨年、中国の北京で行なった国際大会はCombat Gamesという言葉を使っています。体操の選手というのはものすごく言葉を大事にしていて、きちんとした言葉を使っています。正しい言葉を使えるということは、整理がきちんとなされているということです。これからはそういったことが必要になります。

それで今度は、学会としてこのようなことをテーマに、例えば、先程お話ししたポーランドの会長のシナルスキー教授をお呼びして、彼がどのように区別して考えているのかを聞きたいと思います。また、韓国からは、アジア武道学会の開催についても要望されています。本当は来年あたりになんとか国際会議開催に向けて計画したいと思っていたのですが、地震や原発事故などの影響も勘案して、自分の意向としては、再来年に国際学会を開催したいと思っています。その場合にどのようなかたちで実施するか、今後検討していくつもりです。

これら二つの学会に出席して、私が一番感じたことは、我々が日ごろから使っている基本的な言葉そのものも、意外と自分の中できちっと整理されていなかったということです。それを自覚できました。大きな命題だと思います。ここをきちんと整理する必要があります。すでに先生方の中には整理がついている方がいらっしゃるかもしれませんが、ならばそれを整理して発信していく必要があると思います。日本の武道というものは、Combat SportsやMartial Artsとは違う、ここは一緒だけここはこういう特性があるなど、様々な整理の仕方があると思います。そ

ういう姿勢が必要ではないでしょうか。

それができるのが、我々武道学会しかないだろうと思っています。そういう話を、話題提供というかたちで今日はさせていただきますが、中身はたいしことはなかったですね。御静聴ありがとうございました。

**司会** ありがとうございます。実は武道学会にはいくつかの委員会があります。

その委員会が3年ほど前、なかなか機能していないということで、むしろワーキング・グループを作った方がいいのではということで、百鬼先生が、4つのワーキング・グループを作られました。そのうちの一つが国際部会です。実は私が座長ですが、これもあまりいまのところ機能していない。だけど、理事の偉い先生方だけでなく、各道の若手の先生方に入っていて、いろんな現状を教えてくださいました。

例を紹介すると、空手の方だとアメリカ在住の方（女性の元世界型チャンピオン）が状況を教えてくださいました。空手の学術的な研究にはあるけれども、まだ少ないそうです。それから柔道はどうかというと、柔道の世界大会で、国際柔道研究者会（IAJR）というのが、そ



れにあわせてやっています。一応IJFの承認した団体ですが、それが柔道界全体とリンクしているのかどうか、その辺にまだ課題があるようです。

そういう中で、実はベネット先生にもメンバーになっていただき、お聞きしました。二例紹介していただいて。ところがいま百鬼先生のお話にもありましており、いつもこういう話になったときに問題になるのは、一つはターミノロジーでもありますし、もう一つは種目のありようです。

われわれ学会は、六つの分科会（柔道、剣道、弓道、空手道、相撲、なぎなた）があります。本当は合気道の方も少林寺の方もいるのに、六つしかないんですね。本当は八つあったっていいわけです。ところが海外での学会と言うと、そこに、テコンドーであるとか、それからもつと、軍隊的な、ミリタリーな技術を取りあげてあったと、ベネットさんから聞いた中には含まれていました。今後お付き合いしていく中で、そこをどういう風に整理しながら交流していく必要があるでしょうか。

**ベネット（関西大学）** そうですね、マーシャル・ウェイかマーシャル・アーツか、ということですよ。結局、マーシャル・アーツという言葉はいま世界中にある言葉なんです。それで、マーシャル・アーツというのは、日本のマーシャル・アーツだけではなくて、現地のマーシャル・アーツ、ニュージーランドのマウリ族のマーシャル・アーツから、ヨーロッパのいろんなマーシャル・アーツがあります。それがようするに世界の文化の言葉として使われているわけです。けれども、武道ということばと、マーシャル・アーツ、おそらくマーシャル・アーツは武芸の直訳だと思うのですが、だから武術でもあるし、武芸というところからきていると思います。

それで、このマーシャル・アーツという言葉がいつから使っているか、調べたことが無いのでわかりませんが、今自分のパソコンの中にある資料をみていたらたまたま、ロンドンにある武道会 (Budo Kai) という組織がありますよね。おもに柔道、柔術を教えていた組織なんですけど、その1919年の議事録を見ますと、Budoという風にかけてあります。その横に、ウェイズ・オブ・ナイトフッドという言葉が書いてあります。騎士道ということですね。それと、ジャパニーズ・コンバット・アーツとか、アート・オブ・ファイティングとか、アートという言葉がよく入るのですが、マーシャル・アーツという言葉は見当たらないのです。それで、マーシャル・アーツがいつ、言葉として使うようになったかはわかりませんが、アートという言葉のニュアンスはけっこう幅広くて、どっちかというところ、武芸、技術的なことがどうしても、ニュアンス的には中心になってくると思います。それが武術とか、そのへんも同じような議論になるのですが、日本のいわゆるマーシャル・アーツは他の国のマーシャル・アーツとどう違うかというところ、「道」がつくと。伝統性や精神性を重んじるという。他の国のマーシャル・アーツにもそういう部分がないわけではないのです。中国にいくとそういう議論もするし。だからヨーロッパとかのマーシャル・アーツは、精神性を重んじるような特徴はそんなに見当たらないと思うのです。あるとすればそれは、日本をまねして作り上げた概念になると思います。そういう意味では、日本の武道が世界のマーシャル・アーツに大きな影響を与えていることになるのです。

マーシャル・アーツだったら武芸の直訳、マーシャル・ウェイだったら武道の直訳になるんですね。それがまあ、私としても、他の国のマーシャル・アーツ文化と日本は独特な特徴がたくさんあるわけだから、武

道という言葉が国際用語になってほしいと思っているわけですね。武士というのは国際用語になっていません。オックスフォード辞書見たらですね、武士という言葉が出てくるのですが、武道という言葉を作るべく使うようにして、武道(マーシャル・ウェイ・オブ・ジャパン)というような言葉を使うようになると、そのうち武道も国際用語になると期待しているわけです。

国際用語になった証拠はオックスフォード辞書に載るか載らないか、それが毎年調査をするらしいですね。そこまで武道という言葉の知名度が、世界中に知られるようになってほしいと思うのですが、で、マーシャル・アーツは決して悪い言葉じゃないと思うのですが、日本の武道文化を区別するのであれば、武道という言葉を中心に使って行った方がいいと思います。

それからコンバット・スポーツという言葉がありますけど、これも最近よくつかうのですが、それが結局ニュアンスとしてプロ・スポーツ、もしくはオリンピックに出ている科目がすぐ浮かんでくるわけです。レスリングとかK1とか、アルティメット・ファイトとかバーリトウッドとかシュート・ボクシングとか。人間形成をいうものをまったく考えず、とにかくどうやって相手を倒すかという、スポーツですね。これは別物なのですけど。

それからコンバット・ゲームズ、これは私も行きました。去年中国でやったのですが、それも最初は全剣連の中にも参加することに反対する人が多かったんですね。剣道は別物だと。言ってみれば、コンバット・ゲームズと違ってただただ、中でもいろいろあるんですね。すごく伝統性、文化性、精神性を重んじるマーシャル・アーツもあって、また競技的な考え方が主流の種目もあったわけなんです。ほんとうにバラバラだったんです。それはもう仕方ないと思うのですが、日本以外のマーシャル・アーツも出

ていたわけですね。ボクシングもあつたし、テコンドーもあつたし。面白いのは柔術もあつたことですね。柔術は完全に、ヨーロッパで開発した柔術の国際連盟があつて、日本の代表はいなかったのです。それが立派な武術だったのですが、そういうのがいろいろあつたので。コンバット・ゲームズということば、日本人はあまり好まないようですけども、それは仕方のないことだと思うのですね。

マーシャル・アーツにするか、マーシャル・ウェイにするか、武道という言葉を見れば、直訳してそうになってしまう。まあそんなに議論にならなかったかな、正直言ってですね、マーシャル・ウェイという言葉を使うようになったのが、武道憲章を英訳した時に、私とジョン・ロジャーズという明治大学の先生が(亡くなりましたけども、少林寺拳法の人で)、あとは佐藤成明先生、先生はマーシャル・ウェイという言葉に思いがあつたようで、考えれば考えるほど、そっちの方が面白いなということになって、武道憲章にはじめて出たわけですね。それがだんだんだんだん、去年出した日本武道館が出した日本の武道という本の英訳バージョンを作ったのですけれども、やっぱり武道という言葉を先に出して、マーシャル・ウェイ・オ





ブ・ジャパンといったら、少しずつみんなその言葉を認識するようになるだろうと期待してそのタイトルにしたわけですよね。いま、武道は結構、世界中の人が知るようになってきていると思います。ほぼ国際用語とっていいところまでできていると思います。だから国際学会とか作ることによって先に出すということになれば、たぶんそれで決定じゃないかと思えますね。

一つ疑問ですが、日本武道学会ということですが、その中で武術とか、いわゆる現代武道と古武道の区別はしていないとか、そういうことはあんまり考えていない。ターミノロジーの話をするのだったら、日本の方ではどうなのかという大きな疑問があると思えますけどね。

**百鬼** おそらく、学会発足当時というのは、武術的な研究、いまの日本で言うと、古武道研究は多くあったと思います。ですが次第に、そういう方はどちらかというと、現代科学とはなじまないとか、理解を示さない人が一般的には多いですよ。で、もう一つは、学会を担っている先生方は教員が多いのですよ。だから学校体育というような観点からの研究が中心になってきたわけで、古武道について軽視していることでは、決してありません。単にそれだけの話だと思います。当然これからそういうことを議論していくときには、そこまで遡っていくはずですからね。

**司会** 今、百鬼会長もおっしゃった通り、研究発表そのものは、今年も宝蔵院流の槍術だったり、昔の廻国修行の日記とかですね、二つ三つくらい予定されています。だから古い時代の研究をやる人はいるわけで、決してわれわれは排除してはいない。ただターミノロジーの観点からいうと、たしかに整理しなければいけないこともあるかもしれないですね。だから「日本武道・武術学会」というのもありかもしれません。そういう古流研究の発表を受け入れて

るのであれば。そういう意味では、この学会のネーミングそのものも課題になるのかなという気がしますね。

**酒井(筑波大学)** もちろん英語のこともありますし、その前に、日本語の概念をきちっと把握するということが、まず重要だなと思えます。いまベネット先生が言われた武芸が技術の問題だという、その捉え方が本当によいのかということもありますし、なぜ武芸と呼ばれるようになったのか。一般的、教科書的に言えば、芸道にある「形(かた)の文化」を取り入れたことにより、これを武芸というようになったという説明の仕方もあるけれども、それも本当かと。では韓国の方でいう『武芸図譜通志』の武芸というのは、そもそもむこうにあった武芸という言葉なのか、それとも日本にあった武芸という言葉がむこうに渡ったのかということがあって。武術、武芸、武道というのがそれぞれどういう概念を持っているのかというのは、一回きちっと歴史的な背景も踏まえて、われわれがやらなければいけない仕事だなと思えます。

それで、それをどういうふうに訳していくのかということですが、この間ハンガリーにいる阿部(哲史)先生と話をしたんですが、科研費プロジェクトの新しいサイトの名前をどうするかということで、いろいろ意見を伺ってみると、マーシャル・アーツとかマーシャル・ウェイズとか、いろんなサイト名をいろんな国の人から案として出してもらいました。しかし、阿部君は、武道学会に所属する武道の研究者や専門家が、マーシャル・アーツという言葉を使えばそれが走る、マーシャル・ウェイズという言葉を使えばそれが走っていく。だから世界各地で海外に住んで武道を推している指導者たちは、日本の研究者たちにはあくまでも「武道」(Budo)で通してくれ、ということを言っていました。ですから極端な話をすると、

ここで発進したことが走っていくこともあるのではないかと思います。

**巽** 最初に百鬼先生の方から、国際武道学会は可能なのかという問題提起がありました。私も最初は疑問があつてですね、武道を「マーシャル・ウェイズ・オブ・ジャパン」とつけていますから、やっぱり日本の文化の世界化をするという風にとらえていたんですが、ちょっと比較をしてものを考えるときに、たとえば文学は、日本文学、中国文学、アメリカ文学、いろいろあると思えます。その区別は文字だとか、民族にあるかと思うのです。その概念からすると、日本武術、中国武術、韓国武術、世界の武術があると思うのです。これはさきほどの文字というような概念で考えますと、刀とか武器の問題だと思えますね。

ですから、いま日本で言っている武道は、なぜ日本武道館(および日本武道協議会)が剣道、柔道、合気道、相撲、空手道、なぎなた、少林寺、弓道、銃剣道まで9つにしたのかは分かりませんが、それを総称して武道と言っているわけですね。これら種目の特色としては、スポーツ種目であり、それぞれ世界の大会ができるぐらいの人口規模をもっていると。それを韓国に当てはめると、テコンドーはオリンピック種目であり、(剣道、空手、柔道はどういう



ふうにくくっているのかわかりませんけど)韓国と日本でくくれば、ある意味では、マーシャル・ウェイズ・オブ・ジャパンとか、とかワールド、またはオリエンタルとかになると、やはり国際武道学会というのは成り立つのではないかと。それが中国開催のアジア大会で「武術」(長剣や短剣など)という種目がでてきますよね。あれもどんどんスポーツ化されて、もっと世界化されれば、中国の武道として、定着してゆく。(中国でも剣道・柔道・空手道はありますから、共通の部分もあるけれども)それぞれの国特有のもの、という感じで。

やはり武道の意味というのは、スポーツ化された近代スポーツの総称というような、当然スポーツ化されるということは、教育的な価値があり、そういう効果が発揮できるというくくりになっているのではないかと考えています。学会の中で、古武道の研究は今の剣道との歴史性ななかで位置づいていると思います。今の剣道に位置づけなくても、古武術そのものが歴史的にほかのものに関われば歴史学会で発表したり、または文学学会の方で発表したりすればいいわけです。そこは剣道のルーツとして、今の剣道にどう生かすべきかという意味での古武術の研究ではないのかと思います。それは柔術も同じかと思いますが。

**司会** たぶん巽先生が仰ったことは、スポーツとしてできる、教育ができる、そういう要素を持ちつつ、精神文化を持っている、そういうところで括れるのではないかと。それが中国の武道であったり韓国の武道であったり、日本のものであったり、その最大公約数的な部分が出てくるのではないかと。そういうところで学会開催が可能ではないかというお話ではないかと思いますが。

**百鬼** 韓国では、普通に話をするときには、大韓武道学会と自分たちでは言っているんですよね。それが字に

すると、みんなマーシャル・アーツになるわけです。だからそれがどういう意味をもつのでしょうかね。例えばジャパニーズ・マーシャル・アーツとして、日本武道館(および日本武道協議会)が武道として九種目挙げております。矛盾を含んでいるとは思いますが、確かに「武道」は総称であるということも間違いないと思います。

しかし中国でかれらはウーシュウ(武術)という言葉を使い、絶対に武道という言葉を使わないのですよ。武道というのはやっぱり日本の言葉ですね。そこのへんが、きちっとした論拠、特性と言うか意義みたいなものが受け入れられてはじめてその言葉が生きるということになるのでしょうか。そういう作業をあわせて行うべきですね。

**司会** ありがとうございます。さきほど百鬼先生のご発表の中で、韓国では圧倒的にテコンドーの発表が多いわけですね。テコンドーはオリンピック種目なわけですし、そういう意味で韓国では、やはりベースはオリンピック種目であるかどうかというところにあると。木甫大学の朴先生だけが剣道の発表だったわけですよ。そういうかたちからいくと、ちょっと我々の今の学会の種目のありようとは違うのかな、という気がするのですが。

**加藤(文教大学)** 今まさに長尾先生も仰った通り、テコンドーがベースと言うのはあるかと思うのですが、では剣道は韓国でどのような学術的な機関誌があるかというところ、一つは、日本の全日本剣道連盟にあたる大韓剣道会が発行している年4回の『剣道会報』がありまして、その中で論文の様なものが出される場合があります。もう一つが、韓国大学剣道連盟が不定期に出している『大学剣道報』というのがありまして、そこでは剣道の論文が出されています。以前そういったところと交流ができないのかということも

耳にしたことがございました。実際に朴東哲先生が剣道の論文を発表されるそうですが、韓国の方で、剣道の発表ができる方はそんなに沢山いないのではないかと思います。その中で一つだけ、剣道とか武道の専門家ではないのですが、ソウル大学の羅永一先生という方がいらっしやって、『武芸図譜通志』も含めたところの、いわゆる哲学史的なことも含めたしつかりとした研究をされています。武道学会というよりは体育史とかそちらの方との関係が深いと思うのですが。そういった方が、大韓剣道会や韓国大学剣道連盟と組んで何ができれば向こうもこと同じような形ができるのかなと思います。ただそういった方向性が現段階ではないので、剣道だけの発表となると、ちょっと日本のようにはいかないのかな、といった印象を持っています。



**百鬼** 基本的にいま韓国では、国家戦略として国際学会の誘致を進めております。先程お話ししました国際武道学会もその一環なのだそうです。韓国の中での武道種目間や大学間さらには地域間での主導権争いなどもあるそうです。

だから我々が主体的に、主導していくというスタンスがないといけません。そういう情報をきちっと整理

するということが、戦略的に必要になってくる。やはり、私も将来的には武道（Budo）というのを辞書にきちっと載るような形で位置づけたいと思っているので、いろんな知恵をお借りしたい。意外と簡単じゃないということですよ。

**司会** 大韓武道学会の場合は、先ほどから百鬼先生がいられている龍仁大学校が中心になっている。元は大韓柔道学校ですね。柔道がリーダーシップをとっていて、そこにテコンドーが入ってきている。テコンドーは、国際連盟の役職者がI O Cのナンバー2だったこともあって、オリンピック種目に入りましたね。そういう背景のある中でも、あえて百鬼先生に行っていたのだのです。一回見てみないとわからないということですよ。

それからポーランドのカーリーナさんがやっているArchives of Budo、これを福島大学の佐々木先生から紹介されて。これはアーカイブとしてもきちんとしたものだと思います。それでリンクを張ってくれということで、武道学会のホームページ上にリンクをはっています。ところが、志々田先生（早稲田大学）が行かれたり、今回百鬼先生も行かれたIMACSSS（Idokanという団体が中心）と、Archives of Budoとの関係が今ひとつよくわからない。それでもあえて先生に行っていたのだわけですよ。これらの背景があつての今日の会ですよ。

**巽** さきほどの百鬼先生の話の中で、世界に発信するということがありましたが、韓国が中心となって世界に発信すると、武道の総称の問題で我々とは齟齬がでてくる可能性がある。事実九種目あつてもですね、発表を見れば（日本では）剣道が（相対的に）多いですよ。それが韓国にいくとテコンドーになる可能性があるわけですよ。マーシャル・ウェイズ・オブ・コリアであろうがオブ・ジャパンであろうが、そ

れを世界でやったときには、国によって変わってくると思います。だから早めに、たしかに百鬼先生がいうように、日本の武道の意味を発信する。今は情報化社会ですので、日本からどんどん発信することが、正しく伝わる方法ではないかなと思います。

**大保木（埼玉大学）** スポーツ関係や体育関係もそうなのですが、体を使う文化でのターミノロジーというのは非常に難しいことだと常々感じています。とくに心と体に関するものを「技」で表現していく世界、特に日本の場合は「芸」だとか「道」だとか、「術」などと呼び、歴史のプロセスの中で使われてきましたが、それが殊に「武術」あるいは「武道」の内容について述べるとき、さきほど酒井先生やベネット先生が指摘されたように、ターミノロジーの問題が喫緊の課題だと思っています。それらの概念を一つ一つ検証していくのは大変な作業になります。たとえば、「道（どう）」だけでも膨大な文献があるし、使われ方によって意味内容が違うこともあり、たんに辞書的な解釈だけでは本質が見えないようです。戦いの技術を追ってきたことが自分自身を強くする方法であつたと同時に、人生一般に通ずる「道」として認識されてきた流れがあると思うのです。状況証拠しかなくて、軽々につかうことができないのですけども、要するに私たちが「武術」といった場合には、その技術だけをさすように考えましょう、また、「芸」と言った場合にはそれが自分自身のCultivateにもなり、社会的にはCultureともなっていくと考え、それが、人間人生一般に通用するみたいな内容をもったものを「道」と考えましょう、といったように仮に概念規定をしておいてもいいのかなと感じています。日本ではとりあえず作業仮説的に概念規定をしておく必要があるのではないか、新たな知見が提示された時点で新たな規定をすればよい

のではないかと。そういう方法でないと、堂々巡りしてしまうことになるのではないのでしょうか。そのようなことを考えた次第ですよ。



**司会** すばらしいご提言をありがとうございます。やはりそれ（概念規定）がまず最初に、国際的な学会の開催にむけて、最初にやるべき基礎作業になるのかなと思います。

さて残りの時間で、実は、昨年の研究会でベネット先生にコメンテーターになっていただいて、あのときに話が出て、いずれ将来的にということでご提言があつたと思いますし、また柔道がすでにやっていますけど、たとえば世界剣道選手権大会等のときに、なにかフォーラムを開催できないか。本当はわれわれの体制を整えば来年のイタリア大会に間に合わせたいという思いもありましたが。ただ、百鬼先生と相談してですね、まずは基礎作業として現状を知ることが大事だし、われわれが何をしなければいけないかを知ることが大事だと。さらに3年後の世界大会になるかと思いますが、もう一回その辺にむけての可能性というのを確認しておきたいんですが。

**ベネット** 去年のコンバット・ゲームズでも、その行事の一つで第一回アカデミック・フォーラムが開催されました。コンバット・ゲームズは、次回3年後にモスクワでやるというのも聞きましたが、もしそうな

れば、第2回のアカデミック・フォーラムを開催することになると思います。柔道も同じようなことをやっていますが、剣道も世界の剣道を研究している人たちに発表の場を与えるということになれば、ものすごく反響が良いはずで、私の仲間にも世界で20人くらい、きちんと研究している人たちがいますけど、発表できる場所が多くないわけですね。剣道の国際学会を開催することで研究者たちに発表の場を与えることになるし、また、これからはもっと剣道とかそういうものを積極的に研究しようという、世界の学者も増えてくるはずで、それが日本の研究者のためにもなると思います。非常にタイムリーなのは、来年のイタリア大会での開催ですが、それが無理なのはよくわかりますが、その次の世界大会で開催できれば大変良いことだと思います。ただその次の世界大会をどこでやるか、まだ決まっていない。韓国か日本で開催されると聞きます。もし日本で開催されるなら完璧ですね。国際学会はやりやすいと思います。仲間はアメリカにもいますしカナダ、イギリス、フランスにもいます。チェコにもいますし、あちこちにいます。

**司会** 組織対組織でいきなりはじめると、非常に難しい問題もあるかもしれませんね。今のベネットさんのご提言のように、本当に学術的に「武道」としてとらえておられる方々とわれわれとがまず信頼関係を結んでいって、フォーラムみたいなものをすこしずつ作っていきながら、国際的な学会を立ち上げていくという方法がいいのでしょうかね。もちろん韓国武道学会やポーランド武道学会と、友好的な関係を続けていく、あるいはほかの武道学会と友好的な関係を作るということも大事でしょうけど、われわれ剣道分科会として考えれば、むしろ世界でまじめに剣道を研究しておられる方々を育てる、育てるといえる方は横柄かもしれませんが、そういう方々

をエンカレッジしていって、もっと発表してください、という場を作ることが必要かと。

**百鬼** 全剣連に、世界選手権大会の折に科学研究発表の場を加えることについてお話したところ、正式ではありませんが賛成して頂いております。

**司会** 昨年3月の研究会のあとも意見交換をしましたが、そういうことは積極的に支援するからと、コメントータとして来ていただいた連盟の先生方も仰ってましたので、あとはわれわれの方でどれだけ実現していただけるかの問題だと思います。

**横地(名古屋大学大学院生・尾張貫流槍術)** 「武道」という定義についてですが、まず「武道」と言う単語自体、100年程度の歴史だと思います。同時に剣道や柔道、武道憲章で定義されている「武道」も100年以内の歴史だと思います。今、武道学会で研究されたいというのは、その100年の間のことを研究したいのか、あるいはそれ以前のことも含めて研究したいのでしょうか。また、そのあたりのことは世界的にどのような状況なのでしょう。日本も含めてですが・・・。

**百鬼** おそらく全く進んでないですよ。実は100年を知りたいから、それより前を、温故知新じゃありませんけどね。ということになるので、時系列的に考えたときに、学問の研究とかはそれをはるかに超えるものじゃないといけないし、どんどんそれは進むでしょうね。そのへんの枠はないということですね。

今、我々が常に考えるべきことは、今どうするのかという。現実どうするかということで、いろんなかたちで調べて、過去にも遡ったりするわけですよ。ある意味では唯物史観的な考え方でやっていることも多いと思いますし。

我々は研究者ですから、そういうところへんが、ちゃんとした素材と云うか、論理的な、科学的な積み重ねといった確かなものを残す作業がものすごく大事で、それをチョイスするのはその時代に生きている人たちなのですよ。非常に地味だけでも大事なものを、それからもう一つは、それがあると、今抱えている問題のときに、実は過去にさかのぼると答えがあるということがあるから、そうすると現在に生きるとことになる。それが学会の大きな役目じゃないかと思うんですよ。

**酒井** もちろんここ100年の話なのですが、じゃあなぜ100年前に「道」という言葉をつけてこういったものの総称として武道というようになったかということ、さきほど弁ネット先生が言われた通り、それまでの伝統の中で培ってきた文化性を言いたいのがために佐藤成明先生は「ウェイ」という言葉が使われたのだと思いますし、100年前にそういったものを表現したいのがために「道」という言葉を使ったというのがあるんですね。ですからわれわれが武道と言っている時には、その道と言言葉が表現したい過去の伝統性、その中で培われてきた文化性というものをもちろん含んだ上での研究だというふうに私は解釈しています。

**司会** ちょっと付け加えさせていただけますと、酒井先生も中心となって、筑波大学の心身統合プログラム(BAMIS)というのをやっているんですが、その中の一環として2月28日にわれわれもパネリストとして話させていただいたんですけども、酒井先生が今言われたような背景の中での「道」の概念がありますね。そういうのを踏まえた上で、今度は個別性の問題があつてですね、剣道、柔道それぞれに。ところがその個別性が、とくに柔道は嘉納治五郎先生という一人のパーソナリティによる部分が大きいというところがはつき

りしていますね。剣道はたとえば山岡鉄舟先生とか、近世からメンタルな部分を濃厚に受け継いでいる部分もありますし、「道」という部分の中で、明治という近代国家の中で作られたものと、一方で近世から受け継いだ個別的・修養的な部分に入っていくのと、両方出てくる。柔道の人が柔道を研究するというのでは、嘉納先生という絶対的なものに触れる難しさがあります。ようやくいま、その絶対的な部分に触れる研究が少しずつ出てきています。

**齋藤（専修大学）** さきほど百鬼先生がお示しいただいたスライドの中で、マーシャル・アーツとコンバット・ゲームズというのが二つ掲げられているという話がありました。その下の方に、マーシャル・アーツと、コンバット・ゲームズに加えてヒューマニティという言葉があったと思います。Archives of Budo（ポーランド）のホームページには「勝つことがすべてじゃない」みたいな文言が書いてあったと記憶しています。海外では、私たちが思っている武道的要素ということに、気付いているのでしょうか。それをその学会自体が求めているのでしょうか。先生があちらに行かれた中で、武道の源流と言いますか、そのような情報を取りにきていたのでしょうか。肌感覚でも構わないんですが、教えてください。

**百鬼** 率直にいますと、私初めて出席して、その学会の副会長にさせられてしまったのです。総会で。日本からわざわざ来たからご褒美にということで。副会長になったのか、あるいは、武道を傘下にしたいということなのかしれません。つまり、今言ったようにいわゆる基本的に武道という言葉は、憧れとか思いというものが、ヨーロッパの方たちにあると思いますよね。それがベースになったんじゃないかというのはあると思いますが、日本から会長も参加したと言うような意味合いで、むこ

うとすれば、意を得たのではないかと思いました。少々後味が悪かったのは事実です。だから私がポーランドにいる時には、あくまでも私は個人的に来たので会長として来たのではないという風には言っていたのですよね。つまり、自分の中に恐れがあって、日本武道学会が取り込まれたと、そう思われたんでは困るわけです。だから、あえてそういうことを言わなきゃいけなかったような心境であったと思います。それが乗り越えし苦労かどうかはわかりませんがね。

もう一つは、矛盾がヨーロッパでも出てきているんじゃないですか。つまり純粋な日本的な哲学・思想であるとか、東洋的な哲学へのあこがれ、それは初期のころの人たちはみんな持っていたはずなのです。そういう人たちの有志が集まって、やっていたと思うのですよね。それが柔道を含めて、あのような商業主義的なものがどんどん入ってくると、もう猫も杓子も。それでもって生活できるわけですから。いま柔道をやめろといったらすごい人数の方が職を失うような形になっていて、もう絶対やめることができないくらいにまで進んでいるわけですよね。そうすると、いろんな考え方の人がいるということですよ。とくに先ほどお話ししたように、ワークショップを見ると、例えばこの人たちは修行と言う言葉が分かっているのかなとかね。演武自体もショー的になっていて、自分のオリジナリティみたいなものを主張しているようでした。お手元に立派な雑誌が回っていると思いますが、自己アピールをしているわけです。

でも大事なことは、例えば昔の話ですがスウェーデンのサンドル伯爵という方が、湯野先生の所へ来て、要するに、西洋哲学では人間の生き方や幸福等の問題について解決できないので、自分は東洋哲学的なものにあこがれ剣道を始めたのだということ、言われたそうです。そういう求め方もあるのです。そのような

人たちもいるはずなのです。そういう人たちへの指標といいますか、それはやはり示しておいてあげないといけません。大衆化という波に流されて、それでもって、ということになれば武道そのものの価値や評価というのが結果的に下がってしまうでしょう。その辺のところを、きちんと発信していくのが我々の役目だと思うんです。



**数馬（工学院大学）** 事務局の立場からお伺いします。いま若い先生方たちが、どんどん海外へ出かけている時代です。武道研究の国際交流の目標としては、私たち日本人がイメージする武道や剣道に対する認識を外国人にも共通認識として持たせたい、ということだと考えます。そこで、海外へゆく日本人は、渡航前にはっきりとした概念を持ってないと出かけてはいけいけいのでしょうか。あるいは言葉で説明はできなくても、まず海外へ出かけて行って、文化や概念の違いを肌で感じ、その体験に基づいて、より適切に表現可能な言葉を模索する方法もありなのではないでしょうか？

私は後者に賛成で、どんどん海外へ行って、それでその違いを知ることが第一と考えます。個人が草の根的な交流をどんどんやっていくことは、異文化交流の集積といった点からよろしいことだと思います。今後私たちの活動指針などについてお話しさせていただきたく思います。

**百鬼** 大変難しい。基本的にはどんどん出ていけばいいと思います。動機は不純かもしれませんが、例えば皆さん大学の教員になったときにね、活動評価ってあるでしょう。たとえば研究評価の場合には、いわゆる国内学会の発表よりは国際学会の発表の方が評価が高いのですよ。たとえば、いま文科省が言っているのは、この研究は国際的な研究ですかと必ず言うのです。つまりね、日本の武道関係の人たちが国際学会に行きますかという話なのです。若い人たちに、その場を作ってあげたいという思いもあるのです。私の中にある本音です。日本で国際学会やったらみんなそこに参加できるわけですから。それは決してデメリットにはならないでしょう。それで結果的に果実として、多くの外国の方に触れ合って、いろんな考え方を知ると。そこで例えば語学の必要性があればそれをやってもいいし、自分にとって必要なたちになればいいわけです。正直言いますと、私も若い頃に、もっと勉強してればよかったなあと、恥ずかしながら後悔しております。だから若い人たちには早くそういったところを経験していただきたいと。まあちょっと動機は不純かもしれないけども。でも、国際的な学会の場で、積極的に発表していくという、その前向きな姿勢は、絶対に忘れないでいただきたいということですよね。

もう一つは、自分が今考えていることを明確に話すというのが大事なことなのです。私も、こういった形で話す中で、自分の考え方がそんなに間違っていないのだなということ、自覚をして帰るわけです。だから、恐れず、失敗をおそれず、やるしかないと思います。今しかないのだから、思い切ってやる、それしかないと思いますよ。やらないのが最悪です。剣道の精神ってそうだと思うのですけどね。まあ一つ頑張っていたきたいと思います。

**司会** 今日は遠路、大阪から坂東先生がこられていますから、今日の感想をお願いします。

**坂東（大阪大学）** 感想ですけども、最近私自身年をとったせいか、恐れたり悩んだりというのが増えてきたような気がします。だまっているとどんどん、他の国から本質的じゃないようなものが広められてしまうので、やはりその点を恐れておりまして、なるべく早く日本の武道の本質的なものが発信できるよう、そして早めに確立できればいいなと思います。

それと、もう一点心配しているのは、特に最近の日本の若い大学生だとか高校生についてのことです。本日お集まりの皆様は専門教育の剣道の方で学生を指導していると思いますが、わたくしの場合、教養教育を教えております。そこで高校生や大学生は武道についてほとんど知らなくてですね。武道と言うのはまず礼が第一ということも知りませんし、相手をやっつける方法、といった認識しかないの、こういう人たちがむしろ外国に行っておかしな発信をしてしまう、そっちの方も心配だなと思います。だから海外に向けて発信することも大事だと思うのですが、その前に、日本の若い人に向けた発信も大事ではないかと、心配しております。

**司会** ありがとうございます。いま坂東先生がおっしゃった最後のところは、来年度完全実施を迎える中学校における武道の必修化のことともつながっていることだと思います。実は今朝、剣道専門分科会幹事会で坂東先生にご指摘いただいたのですが、海外で剣道を教えられた先生方は経験していると思うのですが、海外の方のほうが「日本剣道形」であるとか「木刀による剣道基本技稽古法」であるとか、非常に熱心に取り組みれますね。翻って日本の学生諸君は、なかなか形の意味をしっかりと習おうというムードにならないようです。それはどうしても競技・競技できているので仕方ない部分もあるのですが、海外のそういった姿勢、つまり日本の武道の何を求められ、何が日本の武道の良さなのか、そういうところを今年の剣道専門分科会の企画でやっていただけないかと、坂東先生から御提言いただきました。今日は朝から晩までおつきあいただき、非常にいい御提言をありがとうございました。

皆さん、今日は有意義な時間をありがとうございました。百鬼先生お忙しいところありがとうございました。



# 中学校武道必修化を迎えて、あらためて武道の礼法を学ぶ

弓馬術礼法小笠原教場 31 世宗家小笠原清忠先生をお招きして

日時：平成22年9月3日（金） 14：00-16：00

会場：明治大学 和泉キャンパス剣道場

講師：小笠原清忠先生（弓馬術礼法小笠原流三十一世宗家）

司会：酒井利信氏（筑波大学） 前阪茂樹氏（鹿屋体育大学）

※本稿は、武道学研究第43巻2号にすでに掲載されておりますが、剣道分科会のみご所属の会員もおられますので、武道学研究編集委員長の了承のもと、本誌においても掲載させていただきます。

**酒井** 平成22年度剣道専門分科会企画を開催したいと思います。司会をつとめさせていただきます、筑波大学の酒井と申します。

**前阪** 鹿屋体育大学の前阪と申します。よろしくお願ひします。

**酒井** 今回は、「中学校武道必修化をむかえて、あらためて武道の礼法を学ぶ」と題しまして、特別に弓馬術礼法小笠原流三十一世宗家・小笠原清忠先生をお招きしてお話をうかがうことになっております。

平成24年度から中学校武道必修化が、いよいよ完全実施となります。このことに対しては、すでに色々な取り組みが行なわれており、剣道に関して言えば、限られた時限数のなかでどのように剣道に興味を持たせるか、あるいは、いかに学習効果をあげてゆくかという試みがなされてきています。

また、新学習指導要領においては、多くの教科で「我が国固有（伝統的な）」の文化に触れさせることがとりあげられており、「保健体育」の「改善の基本方針」においては、武道について、「その学習を通じて我が国固有の伝統と文化に、より一層触れることができるよう指導の在り方を改善する」とされています。とくに、教科の「内容」においては、「武道の学習に積極的に取り組み、伝統的な行動の仕方を守ることなどに意欲をもち、健康や安全に気を配るとともに、礼に代表される伝統的な考え方などを理解し、課題に応じた運動の取り組み方を工夫できるようにすることが大切である」

（第1学年及び第2学年）としていきます。

こうした「伝統的な行動の仕方」や「礼に代表される伝統的な考え方」にいかに関心を持たせるか、あるいは理解させるか、という工夫も剣道においてはすでになされてきていますが、一方で、その「伝統的」の部分について、たとえば剣道における礼法のどの部分が「我が国固有」の文化として、また「伝統的な行動の仕方や考え方」として学校教育のなかでとりあげられてゆくべきかについて、議論・考察がさらに深められなければならない面もあるかと思われまふ。

そこで本年度は、武家（武道）礼法の伝統を連綿と受け継いでこられた弓馬術礼法教場三十一世宗家・小笠原清忠先生をお招きして、われわれ武道（剣道）指導・研究に携わるものが、今一度、武道（剣道）における「礼（法）」の意義や、そこに含まれる伝統性について学び、理解・考察を深めることを目的として、本企画を開催する次第です。

**前阪** それでは、私の方から小笠原清忠先生のプロフィールをご紹介したいと思います。小笠原清忠先生は1943年、三十世宗家の小笠原清信先生のご長男として生を受けられました。1966年に慶應義塾大学商学部を卒業され、1992年、弓馬術礼法小笠原流の三十一世宗家を襲名されました。靖国神社、明治神宮、日光東照宮、鶴岡八幡宮、熱田神宮、鹿島神宮など全国各地の神社などで年間40

回以上の神事を奉納され、各地で礼法等の稽古も開催されています。また、海外におかれましても、パリ・エッフェル塔前のシャン・ド・マルス公園や、イギリス皇太子の前で流鏑馬などの神事を催行されたことがあります。社会的活動としては、東京都弓道連盟の会長をはじめ、儀礼文化学会常任理事、日本古武道振興会常任理事、国学院短期大学客員教授、池坊学園客員教授など幅広く、多くの役職を歴任されておられます。主な著書は、『武道の礼法』、『学習漫画・礼儀と作法』、『一流人の礼法』、『図解雑学・小笠原流日本のしきたり』、『小笠原流弓と礼のこころ』、『小笠原流礼法で強くなる日本人の身体』、『小笠原流礼法入門』など多数ございます。そのほかDVD版『一流人の礼法』などがございます。明治以降の小笠原流弓馬術師範・礼法教場については、ホームページをご参照ください。

**酒井** 本日小笠原先生にはお話だけではなく、実技実習を含めてご講演いただければと思います。それでは小笠原先生よろしくお願ひいたします。

**小笠原先生** 「小笠原礼法」というのは、武家礼法です。武家礼法とは一体、どのようなものでしょうか。一般のスポーツとは少し違います。スポーツであれば計画をたて、試合に向けたトレーニングを何日も積むこととなります。ところが、武家社

会になると明日、戦があるかもしれない。そのような中で、普段の生活の中で、足腰を鍛えなければ、そのためには何をするか。礼法で足腰を鍛えるということが、江戸時代から求められていまして、それを実践してきました。今の社会ですと、どうしても楽なほうに、楽に楽にということ、どんどん体が衰えていってしまうことが多いと思います。古武道の大会が8月にございました。古武道振興会75周年記念の古武道大会だったのですが、それをみていると、外国人の方が一所懸命に日本の文化を吸収しようと取り組んでおられました。ところが、日本の方というのは楽に楽にという考え方のため、そこまで自分の体がついていかないようです。たとえば、立ち居振る舞いについては楽な姿勢をとってしまうことが多くみられます。

私も一昨年まではC大学の体育の授業で初心者には弓道を実技の中で教えておりました。昨年からはT大学で礼法の授業を指導しています。来年からはK大学にて2～4年生に毎週、礼法を指導することになりました。今の学生をみますと、これでいいのだろうかと思うことがあります。幸い中学校に武道が取り入れられるということで、ぜひとも柔道や剣道によって、中学生からしっかりとした礼法を身につけさせてあげたいと思います。弓道は場所をとります。どうしても柔道や剣道にお願いをして、子どもの教育をやってあげたいと思います。

なぜそう言うのかといいますと、大学で昨年からは礼法の授業をもつておりましたが、授業が始まる時に参りますと14畳の和室があるのですが、そこで、学生たちは何人かは寝転んでいる状態です。注意をしても、なぜ自分たちが注意されているかわからない。それで授業を受けるつもりなのか、情けなくなります。ところが、少しでも武道をかじった生徒は、絶対にそのような真似はしません。大学生にまでなつて、一から教え直すことは大変と思

います。昨年からは授業を受け持っています。本当はこの大学生たちに礼法を指導してどうにかなるのか、と不安になります。15回の授業をやりましたが、結局寝っ転がった子は寝っ転がったままでした。いくら注意をしても、注意をすればふてくされて出て行ってしまいます。いないほうが却って楽なのですが、教える意味がないということもあります。ぜひ、中学校に武道が入った場合には、柔道・剣道ではぜひしっかりとした礼法を教えていただければと思います。K大学では、1年生は合気道の必修、それも植芝守央先生自らおでましになって、授業をもつておられます。それを受けた学生たちは絶対に寝っ転がることはありません、ということ聞きまして、来年からは非常に期待をしながらK大学へうかがおうと思っています。

### ■無駄を省く

小笠原流の礼法とは何なのか。一番大切なことは「無駄を省く」ということです。たとえば、みなさん座っておられますよね。そこから立つという所作をしてみてください。

(会場の人々立つ)

さて、体を前傾しないで立つ。反動で立たないでください。そして、そのまま前傾をしないで座ってみてください。これは、床に座るほうが楽なのです。なぜなら、椅子に座っていると、踵の位置、お尻の位置、頭の位置、3カ所がバラバラだからです。それが床ですと、一直線になるので立ちやすくなります。みなさん椅子にお座りいただきましたが、お尻と頭と踵の位置が座った時にバラバラになりましたね。これでそのまま立ち上がるには、よほど腿の筋肉を鍛えていないとだめなのです。なぜかという、前傾して立ち上がると、その過程のなかで体を起こさないといけません。まっすぐに煙が立ち上がるように立ち上がると無駄がない。無駄がないというのは、美しく見えるということにもなります。ですから、歩く場合も、腰を

振って歩く、肩をゆすって歩くようなことはしないほうが無駄がなくなります。そういうことを、昔の侍は日常生活の中で行なっていました。無駄をなくすということは、足腰を鍛えるということにもつながるわけです。小笠原流の場合、礼法があります、弓があります、そして馬にのって弓を引く騎射があります。最終の目標として、小笠原流を学ぶ人たちは騎射をやりたい。馬に乗って走っている馬の上で弓を射る、ということになると馬の反動を受けてしまうと矢を番えられない、的を狙いにくくなる、ということで「立ちすかし」といって、鎧(あぶみ)の上に立った姿勢で射るということを行ないます。足腰を鍛えていないとできないということです。

少しビデオ『社長の礼法』となっていますが、実際には『一流人の礼法』として、販売されているものをみていただきたいと思います。

(ビデオ上映)

これが「流鏑馬」です。馬にのって弓を引くということで、足腰が鍛えられないとできないことかと思えます。ごく基本的なことを行ないます。ここにありますが「跪座(きざ)」、つま立った姿勢です。古武道大会では、各流派の剣術、柔術、にしても正座から跪座になって立つ方がすくなかった。ほとんどの方が





正座からいきなり足を踏み出して、正座から立ち上がるのではなく。正座からいったん跪座という姿勢をとるということを、ここでご紹介いたします。正座から跪座になるには、足（foot）の長さだけお尻をあげて乗せる。そして体が前後移動しないようにする。そして跪座になったときには両方の踵をつけることが大切です。跪座の姿勢をとっていると、アキレス腱が鍛えられます。また、なにかあったときにすぐに動作につなげられます。

### ■座る・立つ

つぎは、「座る、立つ」です。立った姿勢から「跪座」になります。そして跪座から立ち上がります。なるべく前後左右にゆれないように立つことが求められます。これができれば、即立ち、即座りも可能です。ちょっとお立ちになってみてください。（実技）

横を向いていただいて、左の足を後ろにまっすぐ引いてみてください。後ろの足は、大きく引いたときにまっすぐになっていますか。外を向いていませんか。だいたい、普通の方は、片方の足はまっすぐ引けても、もう片方の足はまっすぐに引けない。身体に沿って、外に開いていってしまうことが多いはずです。どうしても、片方の足に体重をのせ

たままもう片方の足を後ろにひくために、身体に沿ってついてきてしまう。

それを行なう時、男性の方は袴をはいていますから足元が乱れてもいいのですが、女性の方が着物をきて、まっすぐ下げようとしたときに足を引くと、裾前が乱れてしまう。そういうことで、「男性は半足（はんそく）引いて座る。女性は半足出して座る」というように、小笠原流では教えています。足を前に出す分にはまっすぐ出ます。引く分には、身体に沿って曲がってきても、出すのはまっすぐにしますので、女性は半足前に踏み出して座りなさい、ということを行います。また、小笠原流の場合は「下進上退（かしんじょうたい）」、「下座（げざ）足（あし）から進み出て、上座（かみざ）足（あし）から退く」という動きがありますが、一般的に弓道では「左進右退（さしんうたい）」という言葉があります。左側から進んで右側から下がる、というのを一般的としているのですが、そうすると上座下座が逆になったときに歩きにくいということもあるかと思えます。とくに、弓道ですと、左進右退にすると、的に向かっているときにはいいのですが、的を横にしたときには左から出れば、的が上（かみ）なのに、的側の足から出てしまうということにもなりかねません。また、近くに上位者がおられたときに、もし左側

も、膝の手前まで踏み出して立ち上がる。

### ■歩く

次は、「歩く」です。歩くって、なんだかご存じですか？ 歩くというのは、後ろの足を前に出すことです。前の足で後ろの足を引きずっていくのは歩くではないのです。ところが、歩くということは、親から一回も教わったことがないはず。歩くというのは、後ろの足を前に出す。なぜかという、「歩く」という漢字がありますね。上にある字は「止まる」です。下にある字は「少ない」です。上にある字は左足なのです、左足は前で止まっている。右足が少しずつ動くから歩くになる。しかし、みなさんは「歩く」じゃない。多分、休めの姿勢で片足を放り出して、次にそちらの足に全体重をかけて、後ろの足をひきずってきている。「違う」という方がおられたら、やってみていただくといいです。（全員立ち上がり実技）

もう、後ろ足をもってこようとするとときに前足に全体重がかかっていますでしょう。後ろの足を前に出すのと違うでしょう。前足で後ろの足をひきずってきている。ということは、非常に楽をしているわけです。本当に歩こうとすると、後ろの足を前に出す、前の足で後ろの足をひきずることではないのです。そこを、（ビデオの中で）見ていただきたいと思えます。「腰を振らない、肩をふらない。」（ビデオ演示者の歩き方を観ながら）

ですから、後ろの足を出そうとしたときに後ろの踵が上がるということは、その時点で前足に全体重がかかっています。後ろの足を前に出すと、絶対に前後に体がぶれないで歩けるのです。これは、かなり足に力が入っているのですが、江戸時代の人は畳の上に薄紙を敷いて、その上で歩く練習をやらせたといわれています。今の人たちには絶対に不可能なこと



ですが、稽古次第でできるようになります。

### ■廻る

次は「廻る」です。漢字の「正しい」という字をご存じですね。止まるという字に一本引いてある。左足が上で、右足は下で止まっています。そこに、正しく「Tの字」に合わせる。これが「正しい」です。これも、足先でやると、どうしても廻っていかない。腰からまわすことによって、正しく廻れるということになります。

### ■正しい姿勢

基礎になる前にもう一つだけお話をしてみたいのは、「正しい姿勢」ってなんだということです。もう一度立っていただけますか。（会場の全員が起立する）

ほら、前傾姿勢になっておられる。「正しい姿勢」ってなんですかね。人間の腕っていうのは、肩についています。人間の肩っていうのは横にあるわけですね。ゴリラは肩が前になります。ですから、最近よく手を前で組むという人を見かけますが、これは肩が前にきています。

「正しい姿勢」ってなにかというと、踵をつけて立つと、重心は踵にいきます。学校の体育授業では踵を

つけて立てといわれました。でも重心が後ろにいきます。ですから、足を平行に踏んで土ふまずの前あたりに重心がかかるようにする。そして腕は自然に垂らす。横についている肩ですから、腕が自然に伸びれば体の横に来るはず。襟がすかないように。あごが浮かないように。最後は耳が肩に垂れるように。最近の若い方はパソコンやゲームをおやりになるから、背が丸まっていくので、耳は鎖骨あたりに降りてきます。耳は肩にたれるようにということで、胸を開くようにする。そうすると耳が肩に垂れるようになる。それが「正しい姿勢」になる。後ろに柱があって、身長をはかるようなつもり。そうすると、顎が浮かずに襟もすかない姿勢になると思います。

### ■お辞儀の姿勢

「正しい姿勢でのお辞儀」ってなんだろう。立ったままお辞儀をするときには、腰から上体を曲げればいい。腰から上体を曲げると、肩についている腕は自然と前に垂れる。前に垂れて下げていったらみっともないので（お化けになってしまうので）、それを腿（もも）に添わせて下げる。一番深いお辞儀というのは、膝に手が届くまで体を曲げるのが深いお辞儀になる。上体はそのままに、頭を下げるのではなく顎を浮

かせないように。上体はそのまま保って、腰から曲げる。ということなのですが、踵が着いていますとどうしてもお尻が後ろに跳び出してしまいます。体が「くの字」になってしまいます。「くの字」になったお尻を前に出すためにお尻に手を当てる。これは、正しいお辞儀ではないわけです。そのままの姿勢で、腰から上体が曲げられればいいのですが、まず無理でしょう。少しの「くの字」はやむをえない。上体を保ったまま、腰から曲げていくのがお辞儀。これだけだったら相手に合わせることはできません。お辞儀は、相手と心を通わせることで成り立ちます。そうすると、相手に呼吸をあわせればいいわけです。

### ■呼吸

自分の呼吸がわかりますか。呼吸というのは太っている人も大きい人も小さい人も大体同じです。自分の呼吸でお辞儀ができれば、相手に合わせられる。自分の呼吸がわからないと、相手に合わせようがありません。で、お辞儀というのは「礼三息（れい・みいき）」といって、吸う息で身体を曲げていく。吐く息だけ止まって、また吸う息で起き上がっていく。一度やってみてください。（会場全員が実際にお辞儀をする）



どうぞ、向かい合っておやりになると相手と合わせる事が意識できます。呼吸には止めるっていうのではありません。吸うか吐くかです。吸いながら曲げて、吐くだけ止めて、吸う息で起きる。呼吸でおやりになっていないのが、なぜわかるかというと、身体を曲げていくときはゆっくりです。吐く息だけ止めるとスッと起きてしまう。これは、呼吸に合わせていないからです。動作に呼吸をあわせているのです。動作に呼吸をあわせるのは楽なのですが、呼吸に動作を合わせるというのは大変です。自分の呼吸。動作に合わせない。歩くということと、呼吸をすることは絶対におそろわない。呼吸を意識するのはレントゲンのとき位で、あとは呼吸を意識することはまずないと思います。この間「釈迦の呼吸法」というのを読んでもありましたら、呼吸を意識するには吐く息の呼吸を長くすると、自然と呼吸は乱れないようになると書いてありました。それが本当かよくわかりませんが、自分の呼吸、1日1回5分でも自分の呼吸がなんなのかを見つめていただくと、自分の呼吸というのがわかってくるのではないかと思います。

以前、自分の呼吸は寝ている時を思い出してくださいとお話したところ「私は無呼吸です」とおっしゃる方もいたので、起きているときに、自分の呼吸をしっかりと意識していただくとよいと思います。すべての動作に呼吸が大切になります。呼吸に動作を合わせる。動作を呼吸に合わせるのは楽なのです。それを、一つ考えていただければと思います。(ビデオを観ながら)

そして、ここではじまるのは基礎です。基礎というのは、たとえば後ろの足を前に出すのはどうしたらいいのか、とか。また、お年を召された方が、電車やバスでひざが開く、そうならないようにするにはどうしたらいいのか、というための稽古なのです。まず両足をひらいて、それをまんなかによせて、またひらく。

(映像の動きに対して会場の皆様からフーという驚きの声)

これができれば、後ろ足は前に行く。それからまた横から真ん中に寄せる。また開く。そして内ももの筋肉を鍛えていく。という稽古になります。

### ■お辞儀をして立って歩く

もうひとつみていただくと、これはお辞儀をして、立って歩くという所作です。お辞儀も手をついて頭を下げるのではない。手というのは体が曲がるから、ついてくる。どうしてもお茶の世界などでは手をついてから頭を下げるということが多いのですが、本来のお辞儀は、からだの屈体にもなって手が一緒に付いてくるということになります。その場所、場所によって、礼の仕方が違います。

まず座っております、身体を少し曲げると手が邪魔になるので横に下ります。このときに指先が畳につく、これが「指建礼(しけんれい)」、指が建つ礼。さらに体を曲げますと手の平がつく。これが「折手礼(せつしゅれい)」。さらに体を曲げると膝の前に手がくる。これを「拓手礼(たくしゅれい)」、さらにまげて「双手礼(そうしゅれい)」、

「合手礼(ごうしゅれい)」という順番になります。そして下座足を踏み出して立ち上がる。そして、歩く。

### ■歩く(殿中松の廊下の歩き方)

これは比較的ゆっくりした歩き方になります。赤穂浪士で有名な「殿中松の廊下」というのがありますね。「殿中松の廊下の歩き方」は、吸う息で大きく踏み出して、吐く息だけとまるのです。そして吸う息でもう一步踏み出す。そういう歩き方をしないといけない、という歩き方になります。非常に難しい歩き方になります。今度は、先ほどよりも少し速い歩き方でやります。(映像)

### ■膝行

次は大変な動きをします。「膝行(しっこう)」。これは、膝で進むという、御殿様の前に進むときはこれでお伺いをします。進み出て、用が終わるとこのやり方で下がってきます。この所作ができないと、將軍の前には出られないわけです。「御目見以上」の位があれば、こういうことができないといけません。私できないから行きませんというわけにはいかない。男性の場合は開き足をして回るといことになります。こういった基本があります。それではみなさん、実際に広いところで



やっていたかどうかと思います。  
(全員がフロアーで実技指導)

#### ■「歩く」—実技指導—

それでは、とりあえず左足を前に出してみてください。そして、右足を前に。後ろの足を前に。前の足で後ろの足を引きずらない。膝を曲げない。ここは能舞台ではございません。(笑)前傾していないですか。後ろと前の真ん中に重心があれば動くはずなのですね。前足に体重がかかるでしょ。そこで。後ろにかかっていたら絶対に動かない。真ん中に重心がないと。それじゃあ前足ですね。だから、たとえば左足が前であれば右足の踵を思い切り上げてみて、それを下ろす。降ろしたところがちょうど両足の均等な重心の位置。もしくは、両踵を上げておろしてみる。その位置のまま踵をあげないで歩く。引きずらない。

歩くっていうのはものすごく大変だと思います。なぜなら、人はどうしても楽をしてしまう。今の若い人は楽に、楽に生活をしていますから、小さいうちから鍛えていかないといけない。上半身は楽でいいんです。ほら、もう前にきていますよね。ほんのちょっと歩くだけでも汗をかく。それくらい、本来は全身運動になっています。何十年と歩いてこられたのですから、すぐに直るわけがない。礼法をやっても10年はかかるといいます。

完全に前足に重心がかかっていて後ろ足をひきずっています。一歩できれば何歩でもできるんですね。最初の一步をなるべく大きく踏み出しておいて、うしろの足を前に出す。重心移動をさせないで。能の歩き方は膝を曲げて、足をひきずっているんです。上体を動かさないように、膝を曲げてひきずってきている。そうではない。本来は、膝を曲げないで、先程の映像に出ているモデルがやったような動きになるわけです。それが「歩く」です。

男性の場合は一般的に二間を7歩で歩き、女性の場合は二間を9歩で歩くのが昔の目安でした。では、今度は男性であると仮定してやってみます。左足を半足引いてください。そして両膝を曲げていく。そうすると、まず片方の膝が下に付きます。ついた膝が前に出ながら跪座(きざ)の姿勢になる。ついた膝が前に出ます。浮いている膝が沈む。それが跪座の姿勢です。(つまだった姿勢)そのときに、両方の踵をつけます。

跪座の姿勢で、踵よりつま先が中に入るということで、鋭角になればなるほど「即立ち」ができるはずです。「即立ち」ってなにかっていうと、その姿勢で身体を後ろにそらさないまま膝を上げれば立てるということ。前傾しないままですよ。体を反らせない。まだ、たてないですよね。(笑い)

弓の儀式で「振々式(ぶりぶり式)」というのがあるのです。一尺二寸の八角形の的を射るのですが、その格好を一時間するのです。15分くらいは立って弓を引いていますが、それ以外はその格好で待機です。跪座の姿勢で30分待機させられたらたまらないです。

ただ、昔、今の畳が出来る前は、みんなこのかたちか蹲踞というかたちでした。畳ができて正座になった

のですが、それまでは跪座か蹲踞です。剣道は蹲踞ですね。蹲踞からまっすぐ立てますか、前傾しないままです。ゆっくり蹲踞することができますでしょうか。たとえば、蹲踞から立ち上がる時にも前傾をしない、なにしろ「無駄を省くというのが礼法」なので、蹲踞から立ち上がる時にそのままの姿勢を保つことが鍛錬につながるのではないのでしょうか。蹲踞はできるようなので、跪座をがんばってください。

跪座というのは、座しての即応の姿勢です。何か動作をするのであれば即、立ちあがるようになっていきます。正座から立ち上がるとなると、どうでしょう。すぐ立ち上がるとすると腰を切るか、などの動作をしないとイケません。しかし跪座の場合はすぐに動けます。そのまま腰を切りながらでも立てます。では、跪座になりましょう。跪座から立ち上がる時には下座足を踏み出します。踏み出したときに、膝より前に踏み出さないで。お尻は膝より高くあがるわけです。それが第一段階。これを座するには、着いている膝が前に出る。前に出て、跪座になる。次に反対の足を踏み出す、座る、跪座になる。片足を踏み出すとき、膝より前に出さないでください。

立つのはどうするか。出す方の足で立つのではありません。足を踏み



出して、着いている方の膝、腿（もも）で立ちます。蹴るようにして立ちます。そうすると両足で立てます。では、右足を半足引いてください。両膝をゆっくり曲げてください。ついた膝が、前に出ながら、両膝が揃います。踵をそろえる。今、こういう姿勢は日常生活ではおやりにならないでしょう。本来は、正座から立つ場合も必ずこの姿勢をとらないといけません。そして、片足を踏み出す、座る、前に出る。斜めではなく、真っ直ぐ。

（みなさん実践中・・・）

こういうことをやると、あるロータリークラブで「これはどういう人がやるのですか」と聞かれることがあります。ところが、外国人の記者は違います。「日本人はこういういいことができるのに、なんでみんなやろうとしないのですか」と聞くのです。やはり、外国人の武道家は、一緒にやると真剣になって稽古される。日本人は大体、途中でやめめた、になることが多いです。本当に「きついからやるので、きついからやらない、ではない」のです。今の学生さんたちも、きついから辞める、ということが多すぎます。とくに大学の体育会に入る人が少なくなり、同好会などに入会される事が多いのが現状ですね。そこにはやはり、きついことがいやな人が多いの



ではないでしょうか。礼法というのは、自分を鍛えるのであって、相手に綺麗に見せるということではありません。

せつかくですので座りましょう。跪座から正座になります。前傾はしないでください。そのままの状態から跪座から正座。自分の足の幅だけお尻を上げます。上げすぎるとお尻を下げないといけません。これが無駄な動きなのです。自分の足の長さはわかりますか。

正座になってください。お辞儀をするにはどうしたらいいか。その前に、手を後ろに組んで下さい。お尻が踵から離れないように、状態をそのまま前に倒して下さい。どこまで曲がりますか。起きてください。こんど正座になりましょう。今度は、正座になった場合は胸を膝につけます。手を後ろに組んで、胸を膝につけます。お尻は上がらない。体がかたいですね・・・吸う息で身体を曲げていき、吐く息だけ止まって、吸う息で起き上がっていきま。顎が浮かない、襟がつかない。手を腿においてください。お辞儀は体を折ると手が邪魔になるので横に降ります。これが「指建礼」。さらに曲げると手が邪魔になるので「折手礼」、さらに手を曲げると手が邪魔になるので「拓手礼」、さらに深くまげていき、一番深くお辞儀をしたときに肘から手までが床につきま。そして、肘は膝から離さない。肘は膝につける。両方の親指と人差し指がつかます。ついた位置がちょうど鼻の位置になります。指は広げない。親指と人差し指はつける。親指と人差し指の間に出来た三角形に鼻がはいる。日本のお辞儀は「ひれ伏す」からきています。強いものに服従するのにひれ伏す。ですから鼻より前にいくとひれ伏すになってしまう。私も家内の前にいくとひれ伏すようになっていまして・・・（笑い）。一般的にはひれ伏すことはありません。手は鼻の所で止める。

諸外国の挨拶は、親愛の情、または敵意がないという気持ちを表わすのですが、日本のお辞儀はひれ伏すからきているので、なるべくひれ伏さないようにする。そのためには鼻の位置よりも前に出ないことがポイントです。ですから、指建礼、折手礼、拓手礼があつて、双手礼があつて、合手礼という段階を経ていきます。女子の場合、折手礼をこのように手をつくようにします。こういう手は、女性はしないという人が多いのですが、カルタ取りはどうしますか？女性の場合はこのほうが骨格上、楽なのです。ただ、男の人に近い方はこのほうが楽かもしれない（会場、笑い）。

もう一度、お辞儀をしてみてください。男性の場合はこうですよ。指建礼、折手礼、拓手礼、双手礼、合手礼。肘は、膝から離さない。そして呼吸です。吸う息で身体を曲げていって、吐く息だけ身体を止めて、また吸う息で身体を起こす。相手を敬いながら、相手の呼吸に合わせてやるのが大事です。さあ、向かい合っておやりください。（お互いに向かい合って礼の実践）・・・

お辞儀って何かというと、やはり敬意を表することが第一なので、隙を見せないということではない。昔の戦で、絶対にしちやいけないのは、後ろから斬りかかること。馬に矢を射かけてはいけない。前から堂々と立ちあわないといけない。ですから、馬を射てはいけないのです。それから、大将を射殺するときには、矢は「狩俣の矢」を使わなければならない。「征矢（そや）」をもって相手の大将を射た場合は流れ矢にあたって死んだということになる。自分の功績にはならない。ですからお辞儀をするときには相手をうかがいながらしてはいけないのです。

親指は閉じます。普段の手というのは、拝む手そのまま開く感じですよ。（実技）

また、ひとつだけ皆様方にお話することがあります。皆さん座ってください。少し、前に出てくださいますか？と言われたときにどう出てきますか？よく手をついて、漕いで出られる方がいますが、この動きだけは絶対にしないでいただきたい。足の悪い方がおやりになるのは問題がないのですが、健常者がやるべきことではないのです。なぜなら、手が足の代わりをするということは、普段、部屋の障子を足で開けていることと同じことになります。手には手の動きがあり、足には足の動きがあります。少し前に出てくださいますか、というときどうするか、というときと跪座という体勢をとっていただいて、それで膝で進むわけです。小さく、小さく。お尻と膝は開けないで、静かに移動します。小さく進めば膝はあがらない。これが膝でいくとって「膝行」になるわけです。さがる時もそれできればいいのです。これが「膝行（しっこう）、膝退（しったい）」になります。

もうひとつやりましょう。「座って回る」、という動作があります。座って回るといのは、跪座のまま、回りたい方の膝を少し上げるのです。ついている膝で押していきます。そこでちょっと90度回ってみてください。という回り方があります。ついている膝で押していくのです。片方がついているでしょ。足は開かない、女性がそんなことやったら大変ですね。女性の場合は、これで180度回れます。神職がおやりになっているやり方というのは逆です。上げている方の足をおろすことによって、足を組みかえてまわってしまう。これは、腰や腿の筋肉をつかっていない。足を組み替えているだけなので、あれは回るとは言いません。ですから、すべてのことにおいて跪座というのが大変重要な役割をもっているわけです。跪座ができるということは、それだけアキレス腱を鍛えますので、アキレス腱も丈夫になります。

これからは、小笠原流とはなんなの、というビデオが流れます。礼法だけではなく、弓もあって流鏑馬というのがあるということが映ります。これは私の父、先代が「曇目（ひきめ）の儀」を行なっているところです。昔から伝わっている弓の儀式で「百手式（ももてしき）」という儀式です。これは平安時代には、一の黒から中だつたらいくら、二の黒から中だつたらいくら、一番外の黒より中だつたらいくら、という報奨の目安になったのが黒い丸になっているのです。今年の10月24日、平城遷都1300年記念で、平城宮址にて同じような儀式を奈良朝時代の服装でやろうというようなことがあります。百手式というのは、神様をお迎えして、この住吉の鎧というのがご神体になるのですが、それを飾り、それに酒肴を供えて儀式を行なう。

これは鎌倉時代より伝わっている弓の儀式で「草鹿式（くさじしき）」と言って、鹿の的を狙う。どこに当たったのか聞かれて答えられないと外れたことになってしまう。また、どこに当たったか聞かれて、白いのに全部名前が全部ついていて、どこに当たりましたと答えて、正解をしないと外れになる。

これは浅草の流鏑馬です。台東区主催の流鏑馬で、台東区長が総奉行ということになっています。流鏑馬の場合は、馬は30秒位で走り抜けてしましますが、その間、馬の背に反動を受けると矢はつがえられない、的を狙いにくい。よほど足腰を鍛えないとできません。鎌倉時代みたいな馬がいまないので、どうしてもサラブレッドになってしまいます。浅草の場合は230mを24～25秒で走ってしまう。これが京都の下賀茂神社ですと400mとっても馬は20秒前後で走ってしまいます。全部当たると絹一匹をいただける。同じく平城宮址でも10月31日に馬弓を当時のように復元しよう、ということになりました。

こうやって画像をみると馬もゆっくり走っているようにみえますが、実際乗ってみるととんでもない速さです。これが鎌倉時代と平安時代の服装の違いです。普段はこういう木でできた馬で稽古をします。廻す人は必ず上位者がまわすことによって次々と矢を渡されるので、降りるわけにはいかないのです。「馬に乗って・弓を引いて・声を出す」。三つの事が出来ないといけません。

(映像を見ながら) これは私ですが、何十年も前のことです。こういうこともありました。この馬はアメリカのサーカスの馬です。

## 質疑応答

**酒井** それでは席に戻ってください。それでは、せっかくの機会がありますので、質問をお受けいただけるということです。挙手をお願いします。



**浅見（岩手大学）** 剣道では、剣道形をやるときの足の運びとして、右起、左座という右足から立ち上がるという用語があるのですが、今の礼法のなかでは、そういう動作を言葉でこういう風になっているんだ、こういう順番で動かすという言葉の使い方というのがあるのかどうかを教えてください。もう一つは、今の礼法と剣道の礼法がちがってきている、という風に思いますが、そのあたりはどのようにお考えでしょうか。

**小笠原先生** 小笠原流礼法でいいますと、必ず「下進上退」なんです。下座足から出て、上座足から退く。なぜかという、たとえば、えらい方がここにおられる。で、そのときにこちらの足からでると、蹴っ飛ばすようになってしまう。ですから遠い方の足から出なさいと教えます。左進右退でいくと、それを無視することになります。弓道でいうと左進右退なのですが、左から進んで右から下がると、蹴っ飛ばしながら歩くことになります。皇族がおられようが左進右退で歩くと理にかなっていないのではないか。ですから、必ず下進上退。進むのは相手から遠い方、部屋で言えば入口から近い方。その場その場で、上座下座を考えなくてはならない、というのが小笠原流なのです。ただ、弓道連盟は、明治時代からそういうことができたときに、そういったことも考えつかない人も一緒にやっているから、なにか統一しようということで「左進右退」に決めた、という経緯があります。ただ、やはり動きとしては下進上退にしないと、先ほども申し上げたようにたとえば、天覧のとき、あるいは台覧のときに陛下、皇族方に近い方の足から出すのか、それは恐れ多いことなのではないか、という考えもありますね。ですから小笠原流では、下進上退。それは各剣道、弓道、柔道、いろいろな取り決めがあるのではなからうかと思えます。



**草間（広島大学）** 呼吸と礼法について教えていただきたいのですが、体を起こすときに吸うのは理解できるのですが、下げるときに吸いながら下げるといふ観点で、理由があるのかどうか、吐きながら礼をした場合は、礼法としてのとっていいないのか、この二つを教えてください。

**小笠原先生** 小笠原流の場合は、歩く時以外は、呼吸は「吸う息」で動作を行なえ、なのですね。歩くときには交互に歩きますから吸う息吐く息も交互に行なうのですが、他の所作は吸う息で動作を行ないます。ですから合気道の方からも言われました。自分たちは吐く息で動作を行なえるけど、吸う息で動作を行なうのは難しい、といわれたのです。ただ、各道によって違うのであれば、その道でやられることがいいかと思えます。ただ、小笠原の場合は歩く時以外は吸う息で行なえと教えております。吐く息はどうしても速くなり、ハッでも終わります。呼吸に動作を合わせるには吸う息に合わせた方が合わせやすいのではないのでしょうか。

**香田（筑波大学）** 今、全日本剣道連盟では指導要領のなかで袴をはくときに、一般的には左足からはくように指導をされています。これは、意味があるのでしょうか。

**小笠原先生** 女袴は右から、男袴は左からはけ、なのです。男たるもの、主たるものを持つのは左手というのがあります。というのは、左手でもっていれば右手があいている、だからいつでも剣が抜ける。だから常に右手をあげておけ、なんです。袴も左からはけ、ということがあります。上座下座ではなく、男は左、女は右。ひもの折り返しも、男は左で折り変えし、女は右で折り返す。というのが決まりになっております。これは陰・陽に基づくものです。最近、弓道連盟も乱れてきてお

りまして、袴の付け方がひどい。とくに学生は腰にはかないでズボンとおなじようにはいてひきずって歩いているような者が弓道にはおります。やはり、きちっとしたはきかた、とくに左からはく、また、ちょっと脱線しますが袴の履き方は、男袴は後ろをあげるように履く、女袴は後ろがさがるように履けるということがいわれます。くるぶしをみせるなということがいわれているのですが、そのあたりも最近では乱れてきているように思います。昔から五歳の「袴着（はかまぎ）」のときにも教えます。以後自分で履けるようにしろということが袴着にも意味がこめられています。

**有田（筑波大学）** 相対動作であるので、映像とちょっと違うかもしれません。剣道でいえば目付ですが、目線がちょっと伏し目がちのように見えたが、全体には目の位置にはどうでしょうか。



**小笠原先生** 4~5m先を見るようにいいます。カメラがまわっていると一所懸命動かないと、という意識があったので伏し目がちであったのかもしれませんが、そのくらい先をというように言っています。礼の場合には、角度によってももちろん目の位置は下がります。いいことを言っただきました。9月9日~13日まで、代々木体育館にて世界柔道選手権がありますが、講道館の上村館長から礼法の原点、立つこと、座ること、

歩くことをぜひ見せてほしいということで息子をつれて、試合のときに決勝の前に実際に動きをやってくれといわれておりますので、そのときに十分に注意をしておこうと思っております。

**大保木 (埼玉大学)** 先ほど、先生からお話いただいた歩幅のことでありますが、二間を男は7歩で、女は9歩でということでしたが、そう決められた根拠はなんだったのかというお考えをいただければと思います。



**小笠原先生** 昔の人の歩幅ということで、これは現在も弓道連盟では使われております。そもそも、当初の教え、一間を男は3歩半、女を4歩半

だったのを、倍だと割り切れるので7歩、9歩と表現しているのですが、大体人間の歩幅はそのくらいである、そのくらいの歩幅になるというのが昔からの基準だったようですね。それが今でもそのままの基準になっています。弓道連盟でもその歩幅ということにしておりますが、最近私は男女一緒にいいのではないかと、間をとって8歩でいいのではないかと考えています。そうしないと、弓道の場合男も女も同じところでやるものですから、男は7歩、女が9歩だと揃うわけがないのですね。その、女の人には無理して足を延ばしてもらって、男の人には一歩を縮めてもらって八歩でやるようにすると合うのではないですか、ということで、いまは大体男女、歩み寄っていただいて、小笠原流では八歩で動こうとしています。一般的な歩き方として、やはりそのくらいですね。たとえばご自分で畳の上で歩くと大体7歩くらいで歩いていると思います。外で歩く時にはそうではなく、6歩程度で歩いておられますが、家のなかでは男の人は7歩、女の方は9歩で歩いているのが一般的だと思います。それからいっても妥当な歩数ではないかと思えます。

**酒井** 最後に大会実行委員長であります明治大学・平川先生からお話をいただきたいと思えます。

**平川実行委員長** 小笠原先生におかれましては、ご多忙のなかを、我々剣道専門分科会員のために、武道における礼法を、また、ここに含まれます伝統性について、ご指導いただきまして深く感謝申し上げます。今日はまた、多数の会員の先生にご参加いただきまして、我々実行委員としても幸せに思っております。どうか、今回の企画を糧に、また現場での効率よい指導に励んでいただきたいと思えます。本日は先生、誠にありがとうございました。(拍手)

**酒井** 最後に小笠原先生に大きな拍手をお願いします(拍手)





平成21年度剣道専門分科会の会計につきまして、次の通りご報告申し上げます。

平成21年度 剣道専門分科会 一般会計決算書(案) (平成21年4月1日～平成22年3月31日)

1.収入の部

科目	予算額	決算額	差異	摘要
1 前年度繰越金	358,133	358,133	0	平成20年度からの繰越金
2 会員会費	200,000	186,000	14,000	会費2,000円×93口(20年度分4口、21年度分84口、22年度分3口 23年度分1口、24年度分1口)
3 本部助成金	50,000	100,420	△ 50,420	学会本部より助成金(分科会への定額補助50,000円+研究会テーブル起こし代50,420円)
4 広告収入	23,000	0	23,000	分科会HP、「剣道時代」バナー広告(21年度分は22年5月に入金あり)
5 寄付金収入	0	0	0	
6 利息	0	155	△ 155	分科会口座預金利息(4月1日、10月1日)
当期収入合計	631,133	644,708	△ 13,575	

(単位/円)

2.支出の部

科目	予算額	決算額	差異	摘要
1 研究助成費	120,000	170,420	△ 50,420	42回大会分科会企画、研究会、講師謝礼
2 広報活動費	50,000	36,250	13,750	『剣道を知る事典』案内文郵送、献本郵送代
3 印刷・消耗品費	60,000	60,047	△ 47	会報印刷代・事務用品等
4 通信費	50,000	34,880	15,120	郵送代、切手・はがき代代等
5 会議費	15,000	47,870	△ 32,870	幹事会会議費
6 交通費	150,000	54,680	95,320	役員交通費・講師交通費
7 傭人費	50,000	40,400	9,600	事務局アルバイト
8 予備費	136,133	0	136,133	
9 次年度繰越金	0	200,161	△ 200,161	平成22年度への繰越金
当期支出合計	631,133	644,708	△ 13,575	


(単位/円)

監査の結果、適正であることを証明いたします。

平成22年 7月 31日

日本武道学会剣道専門分科会監事

袴田大登 

武藤健一郎 

平成22年度剣道専門分科会の会計予算書案につきまして、次の通りご報告申し上げます。

平成22年度 剣道専門分科会 一般会計予算書(案) (平成22年4月1日～平成23年3月31日)

1.収入の部

科 目	予算額	前年度予算額	差異	摘 要
1. 前年度繰越金	200,161	358,133	△ 157,972	平成21年度からの繰越金
2. 会員会費	200,000	200,000	0	2,000円×100口
3. 本部助成金	50,000	50,000	0	学会本部より助成金
4. 広告収入	23,000	23,000	0	ホームページ、バナー広告 2,000円/月
当期収入合計	473,161	631,133	△ 157,972	

(単位/円)

2.支出の部

科 目	予算額	前年度予算額	差異	摘 要
1 研究助成費	120,000	120,000	0	第43回大会分科会企画、及び研究会の助成金
2 広報活動費	50,000	50,000	0	恒常的広報活動への助成
3 印刷・消耗品費	60,000	60,000	0	会報印刷代、事務用品等
4 通信費	35,000	50,000	△ 15,000	郵送代、切手・はがき代等
5 会議費	15,000	15,000	0	幹事会等会議費
6 交通費	100,000	150,000	△ 50,000	幹事会等交通費
7 傭人費	50,000	50,000	0	事務局および広報活動におけるアルバイト
8 予備費	43,161	136,133	△ 92,972	
当期支出合計	473,161	631,133	△ 157,972	

(単位/円)

平成21年度および22年度の剣道専門分科会特別会計につきまして、次の通りご報告申し上げます。

**平成21年年度  
特別会計決算(案)**

1.収入の部			
科 目	予算額	決算	摘 要
1) 印税収入			
①『剣道を知る事典』初版印税収入	565,800	565,800	印税総額(定価2,500円×3,000部=7,500,000円)×0.1=750,000円 差引支払額 750,000円—源泉徴収税額75,000円=675,000円 買取相殺 675,000円—109,200円(1冊2,100円×52部)=565,800円
②『剣道を知る事典』再版印税収入	225,000	225,000	印税総額(定価2,500円×1,000部=2,500,000円)×0.1=250,000円 差引支払額 250,000円—源泉徴収税額25,000円=225,000円
<b>当期収入合計</b>	<b>790,800</b>	<b>790,800</b>	(単位/円)
2.支出の部			
科 目	予算額	決算	摘 要
1) 研究助成費	300,000	0	国際学術交流の推進(講師交通費、謝金等)
2) 広報活動費	400,000	0	
3) 予備費	90,800	0	
<b>当期支出合計</b>	<b>790,800</b>	<b>0</b>	(単位/円)
当期 差し引き残高(繰越金)		<b>790,800</b>	

**平成22年年度  
特別会計予算書(案)**

1.収入の部			
科 目	予算額		摘 要
1) 前年度繰越金	790,800		
2) 印税収入	-		
<b>当期収入合計</b>	<b>790,800</b>		(単位/円)
2.支出の部			
科 目	予算額		摘 要
1) 研究助成費	300,000		国際学術交流の推進(講師交通費、謝金等)
2) 広報活動費	400,000		ホームページ・コンテンツの英文化
3) 予備費	90,800		
<b>当期支出合計</b>	<b>790,800</b>		(単位/円)

## 日本武道学会第44回大会 剣道専門分科会企画フォーラムのお知らせ

### 剣道の固有性を考える

—海外における剣道学習者が、剣道に求めるもの（長期滞在指導の経験を通して）—

パネリスト 塩入 宏行 (埼玉大学名誉教授)  
本多 壮太郎 (福岡教育大学准教授)

司 会 田中 守 (国際武道大学教授)  
太田 順康 (大阪教育大学教授)

日 時： 平成23年9月1日(木) 14:00-16:00

14:00-14:40 本多先生ご報告

14:40-15:20 塩入先生ご報告

15:20-16:00 質疑応答(ディスカッション)

場 所： D会場 国際武道大学 9号館 3F 9305 教室

#### 趣 旨：

平成24年度から中学校新学習指導要領が完全実施されますが、新学習指導要領においては多くの教科で「我が国固有の」文化に触れさせることがとりあげられており、武道については、「その学習を通じて我が国固有の伝統と文化に、より一層触れることができるよう指導の在り方を改善する」とされています。剣道の内容を「我が国固有」の文化としてどのように学校教育のなかで取りあげることができるかについて、昨年度は礼法をテーマとし、小笠原流31世宗家・小笠原清忠先生をお招きして、武道(剣道)における「礼(法)」の意義や伝統性についてご講演をいただき、またワークショップを通じて、あらためて礼法についての理解を深めることができました。

剣道専門分科会では、本年度もひきつづきこうした剣道(武道)のもつ「我が国固有の文化」としての意義について、考察を深めてゆきたいと考えています。そこで本年大会における分科会企画フォーラムでは、海外における剣道学習者(実践者)が、剣道のどのような点(伝統性、文化性など)を日本固有なもの、あるいは魅力あるものとしてとらえているのか、についての理解を深めることによって、剣道のもつ固有性をあらためて照射してみたいと思います。

パネリストとして、ヨーロッパをはじめとする海外指導の豊富なご経験があり近年ではチリを中心とした南米において指導に携わってこられた塩入宏行先生(埼玉大学名誉教授)と、英国・グロスターシャー大学における剣道授業を担当され代表チームの指導にも携わられた本多壮太郎先生(福岡教育大学准教授)をお招きし、お二方の長期滞在指導のご経験を通じて、海外における剣道学習者(実践者)が剣道に求めるもの(魅力、文化性、固有性等)についてのご報告をいただき、それをもとにしたディスカッションを通じて、理解・考察を深めてゆきたいと考えます。

なお、本企画は剣道専門分科会以外の方、及び一般の方も参加できます(無料)。

## 事務局だより

本年3月11日の大震災、そして放射能で被災された皆様に心よりお見舞いを申し上げます。被災地域の生活や環境が早期に復興することを事務局一同祈念申し上げます。そのようななか、会報『ESPRIT』9号（平成22年度活動報告）をお届けいたします。

本号に掲載しました小笠原清忠先生の礼法のご講演（第43回大会時における分科会企画）は、用意していたパンフレットが不足しその場で増刷する盛況ぶりでした。また、震災の影響で当初予定の3月から5月に変更して開催した研究会では、百鬼史訓先生から韓国およびポーランドの研究動向をうかがい、剣道の研究が世界で広がりつつあり、剣道や武道の歴史を踏まえ、武道文化研究の基盤となるターミノロジーについていち早く日本から海外へ発信すべき現状を伺いました。

23年度は千葉県勝浦市の国際武道大学で開催される学会大会で、「剣道の固有性を考えるー海外における剣道学習者が、剣道に求めるもの（長期滞在指導の経験を通して）ー」と題し、パネリストに塩入宏行先生（埼玉大学名誉教授）、本多壮太郎先生（福岡教育大学准教授）をお迎えしてシンポジウムを開催いたします。

（平成23年9月1日（木）14:00-16:00 於：国際武道大学 9号館 3階 D会場 9305教室）。なお、本企画は剣道専門分科会以外の方、及び一般の方も参加できます（無料）。是非、多数のご参加をお待ちしております。中学校における武道完全必修化を前にして、あらためて学び、確認する場となることと思います。

### （平成23.24.25年度幹事選出選挙結果、および新体制のご報告）

平成23.24.25年度幹事選出選挙を実施し（3月16日投票締め切り）、選挙管理委員立会の下で開票作業を行いました。投票総数53通、うち有効51通（5名連記のみ有効）、無効2通、有効票計255票で、その結果は、以下の通りでした。正式には、本年9月1日開催の総会においてお諮りいたしますが、前例にしたがい4月9日開催の幹事会において会長、副会長、会長推薦幹事（若干名）・監事（2名）を選出し、新体制で実務に当たらせていただいております。どうかご了承のほどよろしくお願い申し上げます。（以下敬称略）

○会長 巽 申直

○副会長 大保木輝雄、中村民雄、湯浅晃

○選出幹事（原則10名ですが4名が同得票数であったため、幹事会において協議し、今期については、選出幹事12名とさせていただきます。）

数馬広二（事務局長）、長尾 進（幹事長）、酒井利信、有田裕二、吉村哲夫

齋藤実、植原吉朗、鍋山隆弘、横山直也、坂東隆男、太田順康、高橋健太郎

○会長推薦幹事(若干名) 氏家道男、田中守

○監事(2名) 武藤健一郎、八木沢誠

\* 剣道専門分科会ホームページ「KENDO ARCHIVES」 (<http://www.budo.ac/kendo/>) は、行事案内、会報ESPRITのダウンロード、研究報告、研究動向、シンポジウムの英文翻訳など大変充実した内容になっております。またお陰様で本会発行『剣道を知る事典』は22年9月に第3版を刊行することができました。これらの活動は会員の皆様のお支えとご協力があったことだと思います。今年一年どうかよろしくお願い申し上げます。

日本武道学会剣道専門分科会事務局

〒163-8677 東京都新宿区西新宿1-24-2

工学院大学 基礎・教養教育部門 数馬広二研究室気付

E-Mail: kazuma@cc.kogakuin.ac.jp



14th WKCより